

■事務所: 〒606-0047 京都市左京区上高野諸木町 50-3 翠川医院内 Tel・Fax : 075-701-8111
Mail : jdgkyoto@hotmail.co.jp website : http://www.jdg.or.jp/list/vjdg_j/36kyoto.html

京都外国語大学 第 11 回「全国学生ドイツ語弁論大会」傍聴記

西尾英之助

京都外国語大学 第 11 回 (2010 年度) ドイツ語弁論大会が、例年のように 12 月の第一土曜日 (4 日) 午後、同大学 171 教室で開催された。「日独交流 150 周年」記念事業でもあった。審査員はドイツ連邦共和国副総領事・ビーダーマン氏、ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川館長・シーコーファー氏ほか 2 名で、学外より 23 名、学内より 3 名、合計 26 名 (17 大学) が出場した。応募総数は 41 名で、出場者を書類審査で決める。必ずしもドイツ語専攻ではない。約 130 名の聴衆の大半は外大の学生や教員であるが、他大学の出場者に加え、引率の先生達も見られた。(これらの数字と会場風景の写真は実行委員会から提供頂いた。)



弁論は各 5 分間でプログラムには各 1 ページの日本語要旨が添えられている。出場資格には 1 年以上ドイツ語圏に住まなかった等の条件があるが、テーマは自由で、ひと夏のドイツ留学の体験や人生観など個人的なテーマから、環境問題や核廃絶にドイツ東西再統一など政治的なテーマなど多岐にわたる。いずれも若者の感性を感じさせる内容であった。ただこれはドイツ語を聞いたというより、日本語要旨を読んだ感想であり、ドイツ語を審査する審査員がどのように評価したかは判らない。以前の大会で「憲法 9 条」についての弁論が 1 位入賞したと記憶するが、ドイツ語弁論大会の趣旨からして、ドイツ語の発音や話し方も評価されるであろう。

私は前半 13 人の弁論を聞いて退席したが、後日実行委員会から京都日独協会あてに審査結果を含む弁論大会の報告と礼状を頂いた。(当協会は例年、副賞を贈り後援団体となっている。) 審査結果は大学のウェブサイトに

掲載されているが、1 位ドイツ連邦共和国総領事賞は京都外大の谷村侑真さんが得た。私見では、2 位京都外大総長賞を得た京都外大の韓国留学生・姜旻京さんの「ドイツの統一と韓国」はベルリン滞在の体験から「分裂国家統一」への具体的な提案 (願望) を述べた内容は現代的で、しっかりした発音とあいまって優れた弁論だった。例年主催大学として予め学内選考を行い、今年は 10 名が応募したとのことである。 (2011 年 3 月 15 日記)

新会長に西尾副会長が就任

京都日独協会は、6 月 24 日にコープイン・京都で今年度の総会を開催し、平成 23,24 年度の役員を選出しました。その結果、西尾英之助副会長が会長に、また長年ご尽力いただきました翠川修会長が新設された初代名誉会長に、それぞれ就任されることになりました。(総会の詳細については、別報でお知らせします)

ドイツ理解を深める絶好の機会 22 年度例会(Stammtisch)のまとめ

昨年度は、5 月 28 日の総会後の懇親会 (第 11 回) を皮切りに、9 月 25 日 (第 12 回) 下程息会員による「トーマス・マンとドイツという国」(詳細前号裏面参照) をテーマで、12 月 25 日 (第 13 回) ファンゴア・ティル会員により「ドイツのクリスマス」というテーマで (詳細本号裏面)、明けて 3 月 26 日 (第 14 回) には田附俊一会員による「生活の中のスポーツ・ドイツ」(次号掲載予定) というテーマで例会を開催し、ドイツ理解を深める良い場を作ることができました。ただ、毎回十数名の参加なので、更に多くの皆さんの参加が望まれます。

●次回例会の予告

第 16 回例会を、9 月 24 日 (土) 午後 6 時 30 分から開催する予定です。詳細につきましては後日ご連絡致します。尚、止む負えない事情で変更されることがあります。

●お詫び

本号は、本来 22 年度内を目途に発行の予定でしたが、担当者の私的な事情のため大幅に遅れたことをお詫び致します。

文化の違いを語る

ドイツのクリスマス

突然、クリスマスのお話とは少し時期外れになり恐縮です。昨年12月18日に開催しました京都日独協会の例会で、京都にお住まいのドイツ人、ファンゴア・ティル ダニエル会員に、ドイツのクリスマスについてお話頂きました。

Fangohr Till Daniel

今日はこのクリスマスパーティを機にドイツのクリスマスをテーマに一言をお話させていただきたいと思えます。ご存知の通り、「クリスマス」は英語の Christmas、即ちキリストのミサから来ている言葉です。ドイツでは、Weihnachten と言いますが、直訳すると「聖の夜」という意味になります。

更に、スカンジナビアの諸言語では Jul と言いますが、それは古ゲルマンの伝統に由来すると考えられます。北ドイツでも Jul という言葉が、例えばクリスマスパーティの際のプレゼント交換の Julklapp という言葉などで今に至るまで残っています。

また、クリスマスは十二月25、26日とその前夜だけの時期ではなく、十二月に入ると既に始まるのです。クリスマスまでの四週間の毎週の日曜日が Advent 降臨節です。ドイツでは Advent にもみの木の枝から編んだ輪を飾って、上に蝋燭を差して毎週日曜日に一本を増やして灯す習慣があります。伝説によれば、1839年にハンブルクの孤児院で初めて行われたといわれています。十二月に入ってから子供はクリスマスが待ち遠しくて、毎日毎日必ずクリスマスはいつかと院長を務める牧師にしっかりと聞かされます。そこで牧師は皆が分かるように、十二月一日から平日は白い蝋燭一本、日曜日は赤い蝋燭一本を灯し子供のためにクリスマスまでのカウントダウンをした話が伝えられています。Adventskalender（毎日小さな扉にチョコレートなどが入っているカレンダー）の由来とも言われています。

そして、ドイツ独特で十二月六日に Nikolaus の日があります。それは英米のサンタクロース、Santa Claus、St.Nikolaus と同一人物と考えられます。ドイツでは子供が十二月六日の前夜に靴を磨いてドアの前に置いておけば翌朝にプレゼントが入っていますが、それは又英米などでクリスマスの日暖炉に靴下を吊るすのと似ている習慣です。聖ニコラウスは古くから特に子供の恩人として崇められていますので、子供にプレゼントを渡す役

になっています。ドイツでは聖ニコラウスの日が別にあるのに対して、英米ではクリスマスの日プレゼントを運ぶ役になっています。

しかし、聖人崇拝を拒否するプロテスタントの影響もあったかもしれませんが、ドイツで聖ニコラウス（つまりサンタ・クロース）が Christkind、幼子キリストに変わっている地方が少なくありません。



コープイン・京都での例会風景。右端がティルさん

ここで、クリスマスの異なる各国の言葉の語源や、様々な登場人物から分かるように、複数の伝統と習慣が混入していることが見えてきます。第一、クリスマスが十二月の25日ごろとは聖書には明白に書かれていません。その日付について様々な説がありますが、ドイツに関しては、十二月二十日前後にある冬至と一緒に来たという説は有力です。この節を裏付けるのは、古ゲルマン人の最も大事な祭りの一つが冬至でしたが、キリスト教化された時に、キリスト教に対する反抗を抑えるために、キリスト誕生ではなく、冬至も同時に祝うことが許されていたこともあってその時期にクリスマスと冬至が被ってきたと考えられます。

最近では、日本と同じく、ドイツでも宗教離れが進んできています。キリスト教やら、仏教やら、無宗教やら、宗教などを問わずに、このクリスマスにどういう意味を持たせるかは自由な時代になりつつあります。イエスの降誕を祝うのが元々の意味としても、今や宗教などに関係なく、第一「愛の祭り」として祝う人が特に若い世代には少なくありません。この「愛の祭り」は決して、日本のように男女間での愛を楽しむために二人きりでデートをするような意味ではありません。この「愛の祭り」は即ち、人間とは何かを反省して、家族に感謝して、隣人愛を感じたり、他人のことに思いやりを示す気持ちを意味します。クリスマスムードとよく言われますが、正にこういう、家族への感謝、他人に対する思いやり、心を暖めるような隣人愛の気持ちではないでしょうか？私にとって、クリスマスとはこういうことなのです。

（ファンゴア・ティル ダニエル
三星ダイヤモンド工業（株）翻訳・通訳業務）